

医者にかからなくても不調はある

里草会顧問 福井正樹

祖父母が病気で日中布団に横になって、休んでいたという記憶がない。祖父の調子がよくなって祖母が休んだほうが良いと勧めても、「なあにチイト仕事すりやあなおる」と言って山仕事などに出かけてゆく。私も経験があるが働いているうちに不調を忘れてしまうことは時々あった。いわゆる森林浴なので、環境のフィトンチッドなどにより細菌などが浄化されるのかもしれない。

それに座敷で横になっていたとしても、夕方になると牛が飼えば桶をガタガタ鳴らして食べ物を催促する。やおら起き出さざるを得ないのであろう。祖母にしても食事時には家族の食事を作らなければならないと思うであろうし、私の記憶では起き上がれないほどの病気で寝ているという場面を思い出すことができない。

もちろん下痢をしたり風邪気味であったりして体調が悪い時はあった。しかしせいぜい7つくらいある置き薬の箱から、効きそうなものを選び出して服用する程度で、医者に行くなどということはしなかった。薬屋さんが廻ってきて、たくさん使っていると紙風船などのささやかなおもちゃをくれるのだが、薬屋のおじさんが喜ぶほど使ってはいなかった。祖父もあかぎれ等で手のひらやかかるとに深い切れ目ができて、膏薬を塗った分厚い紙をあぶって割れ目を塞ぐ程度だった。

鋤を引くのに牛を使ったが、今のようにエンジンの付いた機械は全くなくて、1.5ヘクタールの自作農を営んでいたのだから、重労働の連続である。蚕を飼って繭も村では多い方の出荷をしていた。それだけの桑畑があるので無理を承知で蚕の量を扱ったのであろう。年中使う煮炊きや暖房の薪などを自給し、牛の草など年中の餌もすべて自給していたのだから、病気などをして寝込んだならばたちまち行き詰まってしまっただろう。

伯母のうちでは近所の決まった人を雇って仕事をしてもらっていたが、祖父母は人の労力を借りることはなかった。今から考えてみると大変な重労働を年中休みなく続けていたものだ。農学部で農業労働について議論した時も、日本は欧米の様に毎週教会に行く慣習が無いので、労働時間が異常に長かった。今の働き方改革や週休2日制などは夢のまた夢で、農休日を作ろうという運動が起きたのは1960年代末になって若者が農業を嫌って町に出始めた時期である。仕事を労働としてとらえていないのだから、休むということはすなわち怠けるということになっていた。

しかし病人がいなかったわけではない。家によっては寝たきりの家族を抱えているうちもあったし、地主のうちでは肉体労働をせずに療養している身うちの人も居た。祖父母にしても、自分の長男・次男・三女・四女が成人したのちに病気になり、家に引き取って加療した後に亡くしている。この家の養父母もこのころ亡くしているのだから、「家から葬式の出ない年が無かった」と思い出話をしていたので、病気や病人を知らないわけではない。

それでも休養のために休むという感覚が無かったのは、多くの農山村の生活者が持って

いた勤労感覚なのであろう。

定時制高校に通っていたころの叔父は、黄疸を患って時には休むこともあった。しかしこんな環境なのでいわゆる病人らしく床に就くというのではなく、シジミ貝など取り寄せたりして食養生をし重労働を避ける程度だった。ただしその後50歳ほどで亡くなったので、病気に対する対応は不適切であったのであろう。日本が長寿国になっているのは、やはり世界でもまれな保険治療制度を確立し、健康診断などが緻密に行われているからであって、発展途上国などを思うと恵まれているといえる。

私は疎開して母が大阪の病院で働くようになった頃は、今の途上国と同じような生活環境だったと思う。4歳になったばかりなのだから、しょっちゅう下痢をしていた記憶がある。農繁期の忙しい時は、朝の五時ごろにはたたき起こされてあわただしく朝ご飯を食べねばならない。麦飯や代用食をみそ汁で流し込むようなものだ。今のおやつに該当するようなものはなくて、身の周りの食べられるものは何でも食べた。山ツツジの咲くころは花に埋もれてこれで腹を満たしていた。スイバやイタドリなど子供同士のままごとでも食べた。簡単に掘れる土手の自然薯やサルトリイバラの巻きひげ、ツツジの葉の膨らんだものなど。それに畑に行けば、小麦の稔った実をもんで噛んでいるとグルテンから餅のようなものができる。若いエンドウやソラマメの莢の中の実はわずかに甘く、ナスやキュウリも二つ割にして塩をすり込んで生で食べた。冬にはジャガイモも焼いて食べたし、柿の皮を干して牛にやるものも食べた。

都市の浮浪児のようにひもじいことはないのだが、十分栄養を吸収できていたとは言えない。祖父母が野良に出てしまうと公会堂で、学校に行くまで子供達が集まって遊んでいるのを近くの石灯籠などにもたれて見ていた。村の子供が列を作って登校した後、上の村の子供たちも登校してくる。ある男の子が列を離れて私の所に来て膨らんだおなかを指で押して「この子、子産むんちゃうか」と言った。

手足はやせ細っているのに、お腹だけが異様に膨らんで服の間から突き出していた。発展途上国の栄養失調の子供と同じように、私も栄養失調だったのだろう。敗戦後進駐軍は日本の飢えと非衛生な環境を救うために、粉ミルクなどの多くの物資を放出し、DDTなどの医薬品を大量に供給した。日本兵はマラリヤに悩まされ飢えに苦しんだのに、米軍は豊かな物資と薬品で戦場も快適にし優位だった。それを敗戦後の日本に供給した。

日本人は飢えだけでなくノミやシラミや寄生虫にも苦しんでいた。女の子はDDTを頭に振り掛けられ、学校で全員がカイニンソウとかマクニンとかいう不味い薬を飲まされた。その後げっぶをした女の子が口の周りにうどんをすするように回虫を啜っていた。ずいぶん衛生害虫には悩まされたが、特に回虫は誰もが腹の中に飼っていた。下肥を貴重な肥料にして漬物の野菜にかけていたし、回虫の卵などが風などに飛ばされても口に入る。

進駐軍は生野菜を食べるので下肥を嫌って化学肥料を使用した。その後の食生活や環境衛生の改善は目覚ましいものがある。もう回虫に寄生されている人などいないであろう。回虫の寄生者はアトピーや花粉症にならないらしいが、今では医者も病気も増えた。